入宋僧の影像と真讃

旅行記『参天台五臺山記』を史料として

王　麗　萍

はじめに

私家集『成尋阿闍梨母集』は、成尋（一〇一一～一〇八一年）が渡宋前の治暦三年（一〇六七）から渡宋後の延久五年（一〇七三）まで、八十歳を過ぎた母が自らの心境を詠じた和歌一七五首を収めている。

一方、成尋自身は延久四年（一〇七二）三月から延久五年六月まで、一年三カ月にわたって、宋の商船に乗りこんだその日からほとんど一日も欠かさずに日記を書きつづけた。その日記は『参天台五臺山記』（以下『参記』と略す）である。紀行文学のなかで、慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』とともに、日本僧の中国旅行日記の双璧と称される名作である。

平安時代中期に、成尋のような多くの日本僧が聖地巡礼をめざして海を渡り、入宋僧となった。そのなかで、入宋したまま帰国することなく、宋地で没した人も少なくない。そのような彼らが宋の人々に敬愛されていたことを示す証拠のひとつとして、宋の人々が彼らの影像を描き、それに真讃を作ったことをあげることができる。

成尋の日記には、入宋僧寂照の影像と真讃についての記述のみならず、寂照とともに入宋した元燈の影像と真讃、さらに成尋自身の影像と真讃についての記述もみられる。影像は画像、真影ともいう。真讃はその肖像に対する讃語のことを意味する。

それらの影像と真讃は、入宋僧の経歴を知るうえで貴重な史料であるだけでなく、宋日文化交流を裏づける史料としても貴重である。したがって、本稿で

は、『参記』をもとに、寂照の影像と真讃、成尋の影像と真讃について検討するとともに、影像と文学との関係もあわせて考察してみようと思う。

1　寂照の影像と真讃

寂照（？～一〇三四年）は平安中期の天台僧である。俗名は大江定基、三河入道ともいう。長保五年（一〇〇三）入宋し、宋の真宗皇帝に謁して、円通大師の号を授けられた。寂照は文章や和歌などにすぐれ、『公任集』『小大君集』などの私家集があり、『続本朝往生伝』『宝物集』『今昔物語集』をはじめ、伝記物や説話集などにもその名をとどめている。

宋においては、当時は三司使、のち宰相になった丁謂①の勧めで蘇州の寺に住し、楊億②など一流の文人とも交流を持っていた。また宋の滞在中、藤原道長ら日本の貴族、文人と書状を交わし、日宋の文化交流に大きな足跡を残した。

寂照は渡宋したまま本国には帰らず、異国の地で没した入宋僧の一人である。寂照の宋における遺跡として、蘇州報恩寺内に普門院というのがある。『参記』の延久四年（一〇七二）九月五日の条に、「辰時、為拜圓通大師影、向普門院」とあるように、成尋は天台山巡礼を終え、勅旨を受けて、北宋の都（開封）へ向かう途中、蘇州に着いた翌日の朝、さっそく円通大師寂照の影像を参拝するために、普門院へ立ち寄った。

普門院はもと報恩寺の僧房として、寂照が生前に建立した堂であって、のちに皇帝がさらに諸堂を増築させ、広大な寺となったのである。そして寂照が亡くなった後、宋の人はここに影堂を建てて、寂照の影像を祀った。影堂は「在講堂乾角、莊嚴甚妙、前立常燈常花常香臺、銘之法印和尚花香、有影讃」とあり、すなわち講堂の乾角にあり、莊嚴甚なはだ妙なり、影像の前には、常燈、常花、常香臺が置かれ、これに法印和尚花香という銘文がある。影像には讃が付されている。成尋は謹んでここで焼香した。

円通大師の影像を参拝した後、成尋は「拜圓通大師影、極以悲涙感喜、不可注盡」と述べている。成尋にとって、寂照はもっとも年代の近い先輩だけに、

寂照との対面は、影像によってとはいえ、感無量であったに違いない。

『参記』には、その影像についての詳しい描写がみられないのは惜しまれるものの、その影像に付された讃が書き写されている。ここに全文を示そう。

普門先住持日本國圓通大師真讃

扶桑海國、有山峻雄。師蘊霊粋、挺生厥中。

少慕釋氏、早脱塵籠。歸我聖代、愛我真風。

一錫破浪、万里乗空。祥符天子、延對弥隆。

是身之来、空花可喩。是身之化、水月還同。

長天雲散、高岩雪融。謂相非相、稽首圓通。

治平元年五月初一日

前住持法印大師守堅重修述讃

これによれば、この普門院こそ寂照が住持となった院である。そして寂照の影堂は、治平元年（一〇六四）、日本の後冷泉天皇の康平七年に相当するが、成尋が尋ねたときより八年前に、寂照の後継者にあたる前の住持であった法印大師守堅によって重修されたものである。寂照は一〇三四年卒とあるので、すでに三十年以上の歳月が過ぎさり、成尋の参拝は、寂照の没後およそ四十年目になる。この真讃は法印大師守堅によって作られたとみられる。寂照が若くして仏道に心を寄せていたことや、中国を訪れて精進したこと、また真宗皇帝に謁見したことなどが記されている。

寂照が宋の人に深く敬慕されていたことは、この影像と真讃からも窺われる。きっと多くの人々は寂照の影堂を訪れ、その影像を参拝したのであろう。

なお、成尋は天台山国清寺に滞在中、大慈寺に参詣した。延久四年（一〇七二）五月十八日の条に、「有一老僧、将来日本國元燈上人影像、賜紫大師号并讃、依怱劇不書取、但見日本人影、感涙頗下」と記す。この時、一人の老僧は元燈上人の影像、賜紫、大師号ならびに讃を持ってきて見せた。突然のことでもあって、成尋は元燈の影像に付された讃を書き取れなかったようであるが、元燈の影像をみて感激の涙が止まらなかったという。

元燈とは寂照にしたがって入宋した弟子の一人である。また、成尋は都の伝法院に滞在中、景徳寺慈氏大聖院の雄戩がやってきて面会した。雄戩は天台山大慈寺普賢懺堂の住僧で、元燈の弟子にあたる。雄戩は師の元燈の影像を持っていたと思われる。入宋僧元燈の伝記は明らかではないが、『参記』の記述によって、宋において彼は紫衣を賜り、大師号を授けられたことは知られる。さらに彼も宋の人々に尊敬され、彼の影像と真讃が長く珍蔵されたことも明らかである。

2　成尋の影像と真讃

成尋は円通大師寂照の影像を参拝した後、また船に乗り、蘇州を後にして都への旅をつづけていた。一カ月後の十月十三日、ようやく開封に到着し、勅旨によって、成尋ら一行は当時の仏教経典の翻訳施設である伝法院に住みつくことになった。伝法院に滞在中、成尋は宋の神宗皇帝に謁見することを許された。そして、その後宿願であった五臺山への巡礼も果たしている。

それらを終え、成尋は天台山で修行するため、伝法院を離れることになった。延久五年（一〇七三）三月二十三日の条に、「照大師来請、即行向、告今遠去天台、為毎日瞻礼、欲圖闍梨形、即以畫師令圖、雖鳴嘲被寫已了。大唐作法、圖自形像懸自房、況師影像皆圖持之」とある。これによれば、親しくなった照大師は成尋との離別を惜しみ、毎日瞻礼するため、成尋の影像を描かせてほしいと願ったという。そこで、すぐさま絵師を呼んで成尋の影像を描かせた。さらに中国の作法としては自分の影像を自分の部屋に懸けるが、まして師の影像は誰しもが持っていることは明らかである。照大師は成尋を師として尊敬し、彼を慕って絵師に描かせたのであろう。

ところで、三月二十七日に、成尋は絵師に上絹一疋を渡した。さらに四月十一日に、絵師に銭一貫を与えた。これによって、少なくとも、成尋は自分用の影像一幅をも絵師に描かせたようである。

延久五年（一〇七三）四月十九日の条によれば、成尋は自分の影像を日本へ

送ることを決めた。その影像には、伝法院の文恵大師智普から贈られた真讃が付されている。この真讃の筆跡は伝法院の照大師だという。文恵大師は訳経の証義文章の役職で、伝法院において訳経に携わっていた重要な人物である。成尋が五臺山を巡礼した後、宋の皇帝に上呈した「慶悦表」は文恵大師によって作られたものである。一方、照大師は大きな文字を書くのがとても上手で、勅によって泗州普光王寺の額を書き、そして高麗国の使に贈った「大羅漢」の三字を書いた人物でもある。成尋より神宗皇帝に上呈した数多くの奏状は照大師に清書してもらったものである。

さて、この真讃を示すと、次のとおりである。

日本國善恵大師寫真讃

譯義文恵大師智普述

禀粹日天、為釋之賢。分燈智者、接踵奮然。皇帝饗應不異奮然故云。

觀國之光、蒙帝之澤。聿遘良工、遽傳高格。

慈相克肖、乾城妄瞻。滄海萬里、秋空一蟾。

遐寄歸舸、衆仰无厭。

熙寧癸丑孟夏五日譯舘西斎書

この真讃で注目されるのは、「聿遘良工、遽傳高格。慈相克肖、乾城妄瞻」の句である。すなわち、幸いすぐれた絵師に出会い、その高尚な人格と慈愛あふれる容貌が真に迫って描かれたという意味である。そして最後の「遐寄歸舸、衆仰无厭」の二句から、この影像は日本に送ることが明らかであるので、成尋はあらかじめ文恵大師にこの影像を日本へ送ることを伝えたと思われる。

ちなみに、この真讃の題名は「日本國善恵大師寫真讃」となっており、そして書写の日付は、「熙寧癸丑孟夏五日」すなわち熙寧六年（一〇七三）四月五日になっているが、実際のところは一週間前に文恵大師はすでにこの真讃を成尋に渡していた。それをすぐに書写しなかった理由は、その時、まだ神宗皇帝より善恵大師号を授けられていなかったからである。成尋は中書門下から賜善恵大師号の文書を受けたのは、四月四日つまり書写の前日であった。

ところで、なぜ同行してきた弟子五人の帰国に際し、みずからの影像を彼らに託したのであろうか。その由緒について、成尋は次のように記している。

年餘六旬、旦暮難期、滄海波万里、去留無定、故圖真影、送一室人、若聞往生極楽之日、披此真影、念弥陀号、廻向西方矣。記此由間、落涙難抑。

すなわち、自分はすでに六十歳あまりの老躯となり、残る人生はそんなに長くはない。しかも今の自分は遠い中国におり、日本に戻れるかどうか分からない。したがって自分の影像を描かせて、日本にある同門の人に送りとどけるが、もし自分が極楽に往生したと聞いたら、この影像を取り出して阿弥陀の名号を唱え、西方浄土を廻向してほしいというのである。なお、この由を記している間に、成尋は涙をこぼして抑えられなかったという。

このようにして、帰国を見送った成尋の身代わりとして日本に渡った影像は、大雲寺に安置された。多くの人々はここを訪れ、この影像を拝し、成尋が宋の人々にも尊敬されていることをしのんだとみられる。そのことを次の二、三の史料によって証明しよう。

(1)『水左記』承暦四年（一〇八〇）十月廿二日の条に、

未剋許與法性寺座主同車向石藏右衛門督建立堂、次尋到入唐成闍梨舊房、見其影像、容貌不變、情感難抑、遂賦一絶、是述懐也、即呈皇后宮權大夫并西隣都督令同之。

とあるように、その日、源俊房は成尋の旧房を尋ねたところ、そこには成尋の影像があった。その変わらぬ容貌を見るにつけ情感を抑えられなくて、ついに一絶の詩を賦した。これは成尋を述懐する内容である。成尋は永保元年（一〇八一）に示寂した。したがってこの時彼はまだ生存中だったはずである。

(2)『中右記』長承三年（一一三四）二月廿八日の条に、

為訪治部卿入道所悩、相具頭辨今朝入石藏、謁入道、此次見故入唐成尋阿闍梨影像、繪圖容顔五十餘人、華麗殊美、着墨衣居赤倚子也、見此影心中隨喜、晩頭歸洛。

とあるように、その日、藤原宗忠は成尋阿闍梨の影像に参拝した。その影像の

容貌は五十歳あまりで、はなやかでうるわしくて、墨衣を着て、赤い椅子に座っていた。この影像をみて、心中に随喜するものがあったとのことである。

なお、『中右記』で注目されるのは、成尋の影像の記述よりも三十二年前の康和四年（一一〇二）六月十九日の条に、「終日候御前、従院御方被奉屏風面十二帖、是故成尋阿闍梨入唐之間、路次従日域及唐朝圖繪也。尤有興者也」と記されているように、成尋の入宋巡礼の図絵屏風十二帖があったことを伝えている。

(3)『元亨釋書』巻十六、力遊に、次のような内容がみえている。

予遊大雲寺問尋事、主事出像示之、容質渾厚、實有徳之儀也。上有賛、曰：（中略）亦有十八羅漢及僧伽像、其畫妙細、良絶筆也。主事曰：宋后嘱尋、尋共肖像寄来。予見像賛及名畫等、信尋之立宋地之不妄矣。

すなわち、虎関師錬は大雲寺を訪れ、成尋のことを尋ねたところ、主事から成尋の影像を見せてもらった。その容貌は深みがあって、実に徳のすぐれた人の相好であった。また影像とともに送ってきた十八羅漢と僧伽像もなかなか素晴らしい名画である。師錬は影像、真讃、名画をみて、成尋が宋の地で立派にやっていることを確信したという。

3　影像と文学との関係

前に述べたように、宋の人々は寂照や成尋の影像を描き、そのうえ真讃を作った。ところで、『参記』によれば、影像に対して、讃のほか、詩、頌、偈のようなものもみられる。

成尋が伝法院に着いてほどない延久四年（一〇七二）十月十九日の条によれば、「未時、行向文恵大師房、年六十三者、自畫影像、注名并自身無常由詩」とあり、すなわち文恵大師の部屋を尋ねたら、文恵大師はみずから自画像を画き、そして自作の「無常詩」を書きこんでいたようである。

なお、三カ月後の延久五年（一〇七三）一月二十九日の条に、

向文恵大師房、見寫吾形像懸壁、即作頌、云：

吾相非相、徒勞郢匠。郢匠既傳、復成幻妄。

幻妄匪真、真亦假名。虚堂獨對、水月澄明。

とあるように、ふたたび文恵大師の部屋を訪れたら、成尋の影像を写して壁に懸けてあった。それをみて、成尋はみずから頌を作った。ちなみに、成尋は大雲寺にいるとき、和歌を詠じたが、漢詩を賦せず、入宋した後、しばしば宋の高僧などから詩を贈られた。成尋はこれらの詩を『参記』に書き留めているものの、決して酬せず、詩を賦することを戒めていたようである。したがって、『参記』において成尋が作ったこの頌が唯一の漢詩作品ということになり、きわめて貴重である。

さらに、延久五年（一〇七三）四月十六日の条によれば、嵩大師は自分の師である伝法院の梵才大師三蔵の影像を持っているが、その影像には、三蔵みずから作った偈が付されている。成尋はその偈の全文をその日の日記に抄録している。その冒頭には、「小師徳嵩寫予真、乞讃。以偈答之」とあり、弟子の徳嵩は私の影像を写して讃を乞うたので、偈を以てこれに答えたという。

このように、影像に対して讃のみならず、詩、頌、偈のようなものも生まれてくる。中国では、「詩画同源」あるいは「詩配画」という言葉があるように、詩と画とは密接な関係にある。讃、頌、偈のたぐいは厳密にいうと詩ではないが、韻を踏んでいることで、散文に対して、韻文と呼ばれる。

いずれにせよ、高僧の肖像画たる影像には讃、詩、頌、偈などは付き物のようである。そして「詩配画」つまり詩歌に絵画を添えることがあれば、「画配詩」つまり絵画に詩文を加えることもある。影像から讃、詩、頌、偈などが生まれてくることは後者の例にあたる。逆に讃、詩、頌、偈によって、影像が一段と引き立つことも言える。

影像には讃など多様な文体が使われることは、影像の用途によるものと考えられる。例えば、寂照の影像は影堂に懸けるため、また成尋の影像は日本に送るため、こういう場合は讃がよく用いられる。もちろんその讃は他人によって作られ、古今を問わず自画自賛は嫌われるようである。一方、自分の影像を自

分で持つ場合、あるいは自分の影像を他人に持たせる場合は、詩、頌、偈などが用いられ、その作者は他人でなく、影像の本人に限る。

おわりに

以上のように、成尋の旅行記『参天台五臺山記』には、入宋僧の影像と真讃についての記述が多くみられる。寂照や成尋は宋の人々に深く敬慕され、その影像を描かれ、そして真讃を作られたことは明らかになった。これらの記述は入宋僧を知るうえで貴重な史料であるとともに、宋日文化交流を裏づける史料としても極めて貴重である。

また、影像と文学との関係も明らかになったと思う。影像に対して、その影像の用途に応じて、あるいは作者がその影像をみて感じたこと、書きたいことに応じて、讃、詩、頌、偈など多様多彩な文体が用いられるのである。

寂照と成尋の影像が今に伝わっていないのは、とても残念なことである。しかし、われわれは『参記』に書き残された真讃によって、彼らの影像のありようをいろいろと想像することができる。この意味で、影像は真讃とともに存在し、輝き合うものである。

『成尋阿闍梨母集』は延久五年（一〇七三）五月五日の日付で終わっているので、母は成尋の身代わりとして帰国した影像と対面できたかどうか、確認することはできないとしても、異国にいる愛児の影像と真讃は母のもとに届いたと信じたい。

［注］

①丁謂（九六二～一〇三三）字は謂之、のち謂之を公言に改めた。蘇州長洲（江蘇蘇州）の人。淳化三年（九九二）の進士。真宗皇帝の天禧四年（一〇二〇）に三司使、参知政事をへて、宰相となった。『宋史』巻二八三に伝あり。

②楊億（九七四～一〇二〇）北宋の文学家。字は大年。建州浦城（福建浦城）の人。淳化三年（九九二）の進士。真宗皇帝の時、翰林学士に任命された。『冊府元龜』、『宋太宗実録』の主な編纂者。『宋史』巻三〇五に伝あり。

＊討議要旨

松尾剛次氏は、入宋僧の影像は他に例があるのか、と尋ね、発表者は、今のところ他にはない、と答えた。

王勇氏は、源信の『往生要集』が中国の天台山に送られ、それを読んで感心した中国の僧が、日本から影像を取り寄せて礼拝した、という逸話があり、従来は荒唐無稽だと言われていたが、今回の発表の例を考えると事実かも知れない、と述べ、中国の研究者は、入宋僧の日記に強い関心を示している、それは漢文で書かれていて読みやすいこと、中国の資料にはない記述があること、による、アメリカのBogen氏が定本を作成中と聞いたが、日本や中国の研究者は定本を作っているのか、と尋ね、発表者は、提出済の博士論文に部分的に作成したものを付けた（現在全体の定本を作成中）、と答え、座長の山口博氏が、島津草子、平林文雄両氏の研究を紹介し、歴史学からの研究には森克己のものがある、と補足した。

相田満氏は、讃ではなく真讃という語を使ったのはなぜか、と尋ね、讃としても同じ意味だが、「影像」という熟語に合わせて「真讃」とした、と答えた。